

ほんばこ



No. **36**

日本教育会館 附設 教育図書館通信

復刊第36号 (通巻第52号)

2011年11月16日発行

〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋2-6-2

日本教育会館5階

教育図書館

Tel/Fax : 03 (3230) 4437

Mail : toshokan32304437@jec.or.jp

<http://www.jec.or.jp/tosho/>

● 目 次 ●

- ・「知識」を解凍せよ 池田 賢市 2p
- ・教育図書館のご案内 2p
- ・最近の受入図書(1) 教組刊行物・平和資料など 3p
- ・図書紹介……橋本紀子監修『こんなに違う!世界の性教育』 中川登志男
(2011年4月、メディアファクトリー新書) 4p
- ・最近の受入図書(2) 歴史・社会・教育・文芸ほか 5p
- ・編集部 7p

「知識」を解凍せよ

池田賢市

先日、電車の中で学習塾帰りの小学生同士の会話を聞いた。「歴史」に関する問題を出し合っていた。

—645年は……

—大化の改新だろ。

—1937年……え〜っと……

—国家総動員法？ 38年じゃない？

すごいなあ……。 「国家総動員法」を小学生がこんなに堂々と発音したことに違和感をおぼえながらも、感心してしまった。と同時に、やけに時代が飛ぶなあとも思い、そして、この子たちは国家総動員法が何であったかを知っているのだろうか、と不安を感じた。年代と出来事を一対一対応で暗記するという方法が批判されて久しいが、受験現場では、いまでも「基本」なのかもしれない。

まずは暗記でかまわないから何があったかを知らないことには学習が深まっていかない、ということなのかもしれない。しかし、本当に学習を深める基礎となっているのか。もちろんこの会話だけから何かを論じることは乱暴だが、せつかくの知識がバラバラの状態のままにされることは避けなくてはならない。

知識は教科書に書かれてしまうと、まるではじめからそのような状態として存在していたかのように感じるが、実際には、さまざまな生活経験そのものであったはずである。そのなかから長い時間をかけて法則化され、あるいは事実が解明され、後世に引き継がれるべき「知識」となったのであろう。もちろんその過程は一義的なものではなく、したがって、いろいろな「知識」があり得るし、時代とともに変化もしていく。「知識」は政治的性質を帯びているのであるが、ここで教科書検定のあり方を問いたいわけではない。「知識」の動

的側面に着目したいのである。

覚えるべき対象だと思つくと、知識は固定したイメージになるが、参照すべき経験だと思つくと、自らの経験と重なり、ダイナミックなものとしてイメージされる。文字として閉じ込められた知識を、もう一度、解放（解凍？）し、生きたものとして感じ取っていけるような「学校の風景」が描けないだろうか。

学校で長い時間かけて勉強し、たくさんの知識を吸収しているはずなのに、目の前で起きている現象について考えることができない、ということがよく起こる。「知っているのに、わからない」という現象である。その存在・方法に賛否はあるものの、OECDの学力調査（PIISA）が明らかにしたのは、このことだったのかもしれない。

たとえば、福島原発事故をわたしたちはどんな問題として認識し、後世にどう伝えていくのか。「原発がなければ電力需要に応えられないではないか」「放射線が高くても病気にならない人もいないか」といった言説（暴論）が根強いうちは、福島の事故は、電力不足、堤防の高さ、放射線と健康被害との関連といった問題としてフリーズさせられてしまう。「本当に電力は足りないのか」、「なぜ電力需要は増えたのか」といった疑問が頭に浮かべば、まるで違う問題として見えてくるだろう。わたしたちには、この経験を社会のあり方の大きな画期にしていく責任がある。

（いけだけんいち 中央大学教授）

教育図書館について

教育図書館は1966年10月1日、(財)日本教育会館の附設図書館として設立されました。教育関係図書を中心に、日本教職員組合結成以来の刊行物、全国教研集会報告書などのほか、国民教育文化総合研究所（略称教育総研、前身は国民教育研究所）の研究成果、教育学一般、教育実践記録などを重点的に収集、閲覧に供しています。

現在、地域の人々をはじめ、より広範な利用に供するため、地域の図書館との提携を深め大学・専門図書館などで構成する横断検索システムなどへの参画も検討しています。

教育や教育問題、教育運動などを真摯に考え、調査研究する人々のご利用をお待ちしています。

蔵書の特徴

教育図書館は教育書を中心に和書約43,000冊のほか、和雑誌・新聞・洋書、洋雑誌など2011年1月現在で、合わせて63,000冊近い図書を収蔵しています。現在、これらの図書はすべて、インターネットで検索できます。

特別コーナー

- 平和資料コーナー：
反核・平和運動、平和教育教材、平和教育実践記録、戦争体験記など
- 日教組刊行物コーナー：
新聞・雑誌、教育政策、教育課程、教科書問題、各部の図書・資料など
- 教育総研刊行物コーナー：
年報、理論講座、ブックレット、季刊「教育と文化」ほか旧民研刊行物も含む
- 日教組教研全国集会報告書・県教研のまとめ
- 都道府県・高教組史誌、同機関誌
- 文部科学省統計調査報告書・刊行物：
学校基本調査、国際比較、教育費、学習指導要領、指導書など
- 海老原治善文庫：
元東京学芸大学教授、教育総研初代所長
- 鈴木喜代春文庫：
児童文学者、元教育相談室相談員

利用案内

- * 開館時間：10：00 ～ 16：30
- * 休館日：土曜・日曜日、国民の祝日、夏期及び年末年始の休館日、臨時休館日
- * レファレンス・サービス：
当館所蔵の図書・雑誌、その他教育に関するお問い合わせに対応しています（電話、FAX、メールによる質問にも対応）。
- * コピーサービス：可
- * 交通案内：
 1. 神保町駅（メトロ半蔵門線、都営新宿線ともにA1出口より徒歩3分）
 2. 九段下駅（メトロ東西線 6番出口より徒歩6分）
 3. 竹橋駅（メトロ東西線 北の丸公園側出口より徒歩5分）
 4. 水道橋駅（JR総武線西口より徒歩12分）

最近の受入図書（1）

（2011年7月～9月受入）

【日教組刊行物】

『日本の教育第60集』日本教職員組合編
アドバンテージサーバー 2011.7

【教育総研刊行物】

『季刊フォーラム教育と文化第64号 特集 教育総研20周年・教育のこれから』国民教育文化総合研究所編 アドバンテージサーバー 2011.8

【教組誌・教組刊行物】

『あなたは戦争を知っていますか』記憶を風化させないために千葉県高等学校教職員組合・千葉県高等学校退職者教職員の会 押尾孔版社 2001.8
『平和教育ガイドブック…新潟県内における韓国・朝鮮人の足跡をたどる』新潟県高等学校教職員組合平和教育研究会著 文久堂 2010.12

【平和資料】

『平和ブックレット2はじめよう平和教育』

山川剛著 葦書房 2000.8

『「日の丸・君が代」を強制してはならない』

澤藤藤一郎著 岩波書店 2006.12

(都教委通達違憲判決の意義)

『激動の夏熊本』 上田穰一著 熊本の戦争遺跡

研究会発行 ホープ印刷 2011.8

《 図 書 紹 介 》

橋本紀子監修『こんなに違う！世界の性教育』

(2011年4月、メディアファクトリー新書)

「日本の教育を発展させるために、私たち研究者は長年にわたって海外の性教育を研究してきました。その成果は、出版物の形でときどき世に送り出すのですが、読者層がきわめて限定的なため、一般の人たちの目に触れる機会はありません。いいでしょう。今回、『新書』という形で本書を出版しようと考えたのは、一人でも多くの方に、日本の性教育の現状を知ってほしかったからです」(250頁)。

そうした問題意識に基づき執筆された本書は、日本を含む世界11ヶ国の性教育について、その概略を紹介している。具体的には、アメリカ、オランダ、フィンランド、イギリス、ドイツ、オーストラリア、カナダ、タイ、中国、韓国、日本の計11ヶ国であり、橋本紀子・女子栄養大学教授の他に、池上清子、池谷壽夫(ひさお)、磯田厚子、大藤恵子、曹陽(そうよう)、田代美江子、朴恵貞(パク・ヘジョン)、広瀬裕子(ひろこ)、渡辺大輔の各氏が執筆者として名を連ねる。

本書によると、性教育の方向性は大きく二つに分かれるようだ。一方は「総合的性教育(セクシュアリティ教育)」であり、これは「性を生物学・心理学・社会学・哲学・倫理学などの分野から多角的にとらえ、他者を思いやりながら、一人の責任ある人間としていかに行動するかを教える

教育」であり、避妊や妊娠中絶、同性愛も否定しないという。もう一方は「禁欲教育」であり、「結婚まで、性交せずに禁欲生活を送ることがいかに重要かを教える教育」だ(16~17頁)。

本書を通読すると、ヨーロッパでは総合的性教育が多く、アジアでは禁欲教育が多いという印象を受ける。総合的性教育は、単に生理学的な領域(月経や射精、受精・妊娠、出産のメカニズム、避妊、性感染症、など)にとどまらず、心理学的な領域(性別意識や異性意識の発達、男女の性的欲求と性行動の特徴、男女交際や性の悩み、同性愛などの多様な性のあり方、など)や社会学的な領域(いわゆる男らしさや女らしさ、家庭や社会における男女の役割の見直しといった「男女間の平等」や「多様な人間同士の平等」、結婚と離婚、家族計画、性加害と性被害、性暴力や売買春などの社会問題、など)を含むものである(9頁)。そして、ヨーロッパ各国の性教育は、生理学的領域にとどまらず、心理学的・社会学的領域にも踏み込んでいる場合が多いことが、本書を読むとよく分かるのである。

一方、アメリカは総合的性教育と禁欲教育との間で揺れている。1964年に設立された民間団体「アメリカ性教育情報協議会」により、総合的性教育が推進されたものの、1990年代以降は禁欲教育が主流となり、特に2001~09年の共和党ブッシュ政権時代は、「アメリカの性教育といえば禁欲教育」であったという。だが、09年に誕生した民主党オバマ政権は、総合的性教育への支持を表明したこともあり、再び総合的性教育への流れにあるという(17~24頁)。

アジアに目を転じると、アジアでも基本的には禁欲教育から総合的性教育へという流れにはあるようで、例えば、韓国における学校の性教育は、「1950年代に『貞潔教育』として出発し、60年代には『純潔教育』へと名称変更。70年代になって『純潔教育』ではない、科学的な性教育が議論されるようになり」、2000年には小・中・高校の教

育課程で性教育のカリキュラムが義務化されるに至ったという（207～208頁）。

だが、アジアではまだ、総合的性教育が主流を占めるという感じではない。タイでは、アメリカ性教育情報協議会が提示した概念に沿って作られたカリキュラムが最も先進的なものであるというが、「あまりに先進的すぎるせいか、このカリキュラムを実施している学校は少なく、09年9月の報告によると、全体でわずか4%」であったという（176頁）。中国では、「改革開放路線が軌道に乗り始めた1980年代以降、性教育についてもようやく新たな動きが見られるようになり」、1988年頃には国家教育委員会から、中学校と高校で「思春期教育」すなわち性教育を普及させるようにという通達が出された（193頁）が、都市と農村との格差という問題もあって、「いまはまだ、より多くの人々に正しく性知識を身につけてもらえるよう、人々を啓蒙し、性教育の普及を推進する段階にある」という（200頁）。

日本の性教育も、一種の禁欲教育だろう。「日本では02年以降、学校の性教育に対する保守派の『性教育バッシング』が起きており、性教育の内容に対する厳しい抑圧と規制が強まって」いて、新学習指導要領では小学校はもちろん、中学校でも性交や避妊法を取り上げられていない（235頁）。中学校の教員へのアンケートによれば、性教育の内容の8割以上は「思春期の体の変化」「妊娠・生命の誕生」「性感染症」といった生物学的かつ保健的な知識で、「避妊法」を教えているのは約3割にとどまる。これは「中学生は性行動をしないという暗黙の前提」があり、検定教科書にも性交、出産場面、避妊については掲載されていないという実情あるためだ（238頁）。

だが、例えば、東京都の高校3年生の性交経験率が、男子47.3%・女子46.5%に達している（233頁）という実態を踏まえた時、性交や避妊に言及せず、禁欲を前提とした性教育が本当に適切なのだろうかと思ふ。「いま、あらゆる国

の性教育で大きなテーマとなっているのが『10代の望まない妊娠』と『H I Vなどの性感染症』をどのように減らしていくか」（248頁）であり、それは日本も例外でないだろう。だとすれば、日本の性教育も、性交や避妊に言及するとともに、生理学的な領域の他に、心理学的・社会的な領域を含む総合的な性教育に舵を切るべきではないかと思ふ。

性教育の充実・強化は、保守派にとっては非常に抵抗感のあることかもしれない。しかし、イギリスにおいて、性教育を学校で義務として行うことが決められたのは、意外にもサッチャー首相率いる保守党政権の時代だった。その背景には、10代の少女の望まない妊娠の増大があり、性感染症の感染拡大やエイズ・パニックがそれに追い打ちをかけたのである（80～84頁）。そのことからしても、性教育の強化・充実という課題は、保守や革新といった垣根を超えたものであると思ふ。

性教育の充実・強化は、「寝た子を起こす」ことによって若者の性行動を活発化させ、性道徳を乱すという懸念も持つ人も少なくないと思ふ。だが、ヨーロッパで最も性教育が進んでいるオランダでは、10代の少女の出産数や中絶数は、日本やアメリカ、イギリスよりも低い（42～43頁）。「臭いものにフタをする」かのような対応こそが、かえって事態を悪化させてしまうことに、私たちは早く気付くべきではないか。そして、そのことを考える上でも、本書は非常に参考となる一冊である。

最近の受入図書（2）

（2011年7月～9月受入）

【社会・教育・軍事関係】

『デフレの正体』藻谷浩介著 角川oneテーマ21
2011.3

『日本中枢の崩壊』古賀茂明著 講談社 2011.6

『官僚の責任』古賀茂明著 PHP研究所 2011.7

- 『日本人の誇り』藤原正彦著 文芸春秋 2011.5
- 『この国の「問題点」』上杉隆著 大和書房 2011.8
- 『民意のつくられかた』斉藤貴男著 岩波書店 2011.7
- 『老いへの「身辺整理」』斉藤茂太著 新講社 2011.7
- 『三くだり半からはじめる古文書入門』高木侃著 柏書房 2011.4
- 『はじめての宗教論 左巻』佐藤優著 NHK出版 2011.1
- 『はじめての宗教論 右巻』佐藤優著 NHK出版 2011.1
- 『男女共同参画白書 平成21年版』内閣府男女共同参画局著 中和印刷 2009.6
- 『男女共同参画白書 平成22年版』内閣府男女共同参画局著 中和印刷 2010.6
- 『男女共同参画白書 平成23年版』内閣府男女共同参画局著 中和印刷 2011.6
- 『科学技術白書 平成23年版』文部科学省著 日経印刷 2011.7
- 『労働経済白書 平成23年版』厚生労働省著 日経印刷 2011.7
- 『PISAから見る、できる国・頑張る国——トップを目指す教育——』渡辺良著 明石出版 2011.6
- 『教育のトレンド2——図表で見る世界の潮流と教育の課題——』OECD教育研究革新センター著 明石書店 2011.9
- 『こんなに違う！世界の性教育』橋本紀子著 メディアファクトリー 2011.4
- 『給与小六法 平成24年版』給与法令研究会著 学陽書房 2011.7
- 『警察白書 平成23年版』警察庁編 佐伯印刷 2011.7
- 『日本労働年鑑 2011年版 第81集』法政大学大原社会問題研究所著 旬報社 2011.6
- 『経済財政白書 平成23年版』内閣府著 2011.7
- 『子ども・若者白書 平成23年版』内閣府著 2011.7
- 『市販本 新しい公民教科書』杉原征四郎他7名著 自由社 2011.5
- 『市販本 新しい歴史教科書』藤岡信勝他10名著 自由社 2011.9
- 『新しいみんなの公民』川上和久著 育鵬社 2011.5
- 『新しい日本の歴史』伊藤隆著 育鵬社 2011.5
- 『文部科学白書 平成22年度』文部科学省著 佐伯印刷 2011.8
- 『女性白書 2011』日本婦人団体連合会編 はるぶ出版 2011.8
- 『防衛白書 平成23年度』防衛省著 ぎょうせい 2011.8
- 『承認と包摂へ ジェンダー社会科学の可能性 第2巻』大沢真理編 岩波書店 2011.8
- 『厚生労働白書 平成23年度』厚生労働省編 日経印刷 2011.8
- 『日本教育政策学会年報 第18号』日本教育政策学会年報編集委員会著 八月書館 2011.7
- 『いま、憲法は「時代遅れ」か』樋口陽一著 平凡社 2011.5
- 『原子力発電で本当に私たちが知りたい120の基礎知識』広瀬隆・藤田祐幸著 東京書籍 2011.5
- 『戦闘機1機で学校は何校つくれるか？』関根一昭著 合同出版 2010.12
- 『クワイ河に虹をかけた男』満田康弘著 梨の木舎 2011.2
- 【小説・エッセイほか】
- 『図書館内乱 図書館戦争シリーズ2』有川浩著 角川文庫 2011.5
- 『図書館危機 図書館戦争シリーズ3』有川浩著 角川文庫 2011.6
- 『図書館革命 図書館戦争シリーズ4』有川浩著 角川文庫 2011.6
- 『謎解きはディナーのあとで』東川篤哉著 小学

- 館 2011.5
- 『おひめさまはみずあそびがすき』ビーゲンセン著 絵本熟出版 2011.5
- 『きみたちにおくるうた』バラク・オバマ著 明石書房 2011.7
- 『信長の棺 上・下』加藤廣著 文春文庫 2010.7
- 『チヨコ』宮部みゆき著 光文社 2011.7
- 『世界どこでもずんがずんが旅』椎名誠著 角川書店 2010.1
- 『猫と妻と暮らす』小路幸也著 徳間書店 2011.6
- 『我らが隣人の犯罪』宮部みゆき著 文春文庫 2011.7
- 『高台の家』松本清張著 PHP文芸文庫 2011.7
- 『魔術はささやく』宮部みゆき著 新潮文庫 2011.7
- 『どうせ、あちらへは手ぶらで行く』城山三郎著 新潮文庫 2011.8
- 『ポニーテール』重松清著 新潮社 2011.7
- 『ふがいない僕は空を見た』窪美澄著 新潮社 2011.7
- 『下町ロケット』池井戸潤著 小学館 2011.7
- 『印象派で「近代」を読む』中野京子著 NHK出版 2011.6
- 『「怖い絵」で人間を読む』中野京子著 NHK出版 2011.6
- 『刑務所図書館の人びと』アヴィ・スタインバーグ著 柏書房 2011.4
- 『「心の掃除」の上手い人下手な人』斉藤茂太著 集英社 2011.6
- 『心を整える』長谷部誠著 幻冬舎 2011.5
- 『久米正雄伝 微苦笑の人』小谷野敦著 中央公論新社 2011.5
- 『困っている人』大野更紗著 ポプラ社 2011.6
- 『社会の真実の見つめかた』堤未果著 岩波ジュニア新書 2011.2
- 『犯罪』フェルディナント・フォン・シーラッハ著 東京創玄社 2011.8
- 『逆境を越えてゆく者へ』新渡戸稲造著 実業之日本社 2011.7
- 『永遠の0』百田尚樹著 講談社 2011.8.3
- 『九月が永遠に続けば』沼田まほかる著 新潮社 2011.9.10
- 『「感情の整理」が上手い人下手な人』和田秀樹著 新講社 2011.8
- 『アフリカの日々』アイザック・ディネーセン著 晶文社 2010.5
- 『人生はピンとキリだけ知ればいい』森繁建・和久昭子著 新潮社 2010.5
- 『今日一日』五木寛之著 徳間書店 2011.8
- 『トビウオのぼうやはびょうきです。』いぬいとみこ著 金の星社 2011.5
- 『ピース』樋口有介著 中央公論社 2011.7
- 『働かないアリに意義がある』長谷川英祐著 メディアファクトリー 2011.7
- 『幸福な生活』百田尚樹著 祥伝社 2011.6
- 『緑の毒』桐野夏生著 角川書店 2011.8
- 編集後記**
- ご案内のように、本号では中央大学教授池田先生から、「知識」を解凍せよと題し巻頭を飾ることができました。
- ご多忙のなか、ご寄稿いただいた池田先生、中川さんに改めてお礼を申し上げます。
- 今年8月に電動書架を新しくしました。より便利にご利用いただけるようになりました。(井上)

